

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

reed

No. **77**

June, 2024

関西大学ニュースレター

発行日：2024年(令和6年)6月28日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp



Cartier

ともに生き、ともに輝く
未来へ向けて

アンコンシヤスバイアス(無意識の偏見)を超えて誰もが生き生きと活躍する社会へ

■対談

宮地 純 ・ カルティエジャパン プレジデント & CEO
前田 裕 ・ 関西大学 学長

■対談 — 1

■研究最前線 / Research Front Line
戦前から占領期までの法と法学の研究
戦時中や占領下、
法学者は何をしていたのか? — 5
法学部 — 小石川 裕介 准教授

• What did legal scholars do during the war
and under the occupation?
Faculty of Law
— Associate Professor Yusuke Koishikawa

■リーダーズ・ナウ — 9

卒業生 — ダンサー・俳優 脇坂 美帆 さん
在学生 — 第102代関西大学応援団

■トピックス [学内情報] — 13

文学部創設100周年を迎え、記念シンポジウムを実施
歴史を礎に、次の100年に向け、
さらなる進化を ほか

■社会貢献・連携事業 — 14

2025大阪・関西万博に向け、多様な活動が活発化
関西大学リボンチャレンジ選定企業9社の
大阪ヘルスケアパビリオン出展が決定 ほか

■関大ニュース — 15

セーリング競技の西田カピーリア桜良さんが
パリ五輪日本代表選手に内定 ほか



ともに生き、ともに輝く 未来へ向けて

アンコンシャスバイアス(無意識の偏見)を超えて誰もが生き生きと活躍する社会へ

宮地 純 ・カルティエ ジャパン プレジデント & CEO × 前田 裕 ・関西大学 学長

SDGsが定着しつつある現在でも、ジェンダー平等への道のりはまだまだの日本社会。
今号では前田裕学長が、女性活躍推進活動に力を入れている「カルティエ ジャパン」の宮地純CEOを訪ね、
大学とラグジュアリーブランドという枠を超え、多文化共生やマーケティング戦略、
2025年の大阪・関西万博など多岐にわたるテーマで語り合った。

◆社会規範にとらわれず、俯瞰して物事を考える

前田 宮地さんは「カルティエジャパン」で日本人女性初のCEO
だと伺っています。そのポジションに立つまでの道のりを聞かせて
ください。

宮地 日本で生まれ、父の仕事の関係で2歳の時にフランスへ、
2年後にイギリスに移りました。7歳で帰国して小学校に通い、中
学校はドイツ、スウェーデン、高校はイギリス、大学でまた日本
に戻りました。

前田 感受性の強い幼少期に異なる文化圏で育たれたわけですね。
ヨーロッパは多様性に富んだ社会だという印象ですが、日本文化
とのギャップを感じることはありましたか。

宮地 日本には「〇〇はこういう風にあるべきだ」という社会規
範が強いのかと、幼いながらに感じましたし、違和感も持ちまし
た。日本人は公の場において発言しないことが多いですが、そ
れでは何を考えているか分からないという感覚が欧米の人にはあ
るようだというのは、今日々実感しています。

前田 私は海外留学をしようという学生には「海外の大学では発
言しないと何も考えていないと思われる。的を射ているかどうか
は別として、自分の意見なり感想なりを発信することが必要だよ」

と口を酸っぱくして言っています。日本の「なんとなく皆と一緒に」
という社会で育った学生を、どう世界に送り込んでいけばいいの
か、頭を悩ませるところです。

フランスでMBAを取られていますが、ヨーロッパで過ごした
経験は、進路選択には影響していますか。

宮地 大学卒業後は、モノづくりに憧れて、メーカー企業で働く
ことを目指していました。そこでインターンシップをさせていた
だく中で「モノを作るためにお金が必要で、お金の流れが数字で分
からなければ、ビジネスが成り立たないしモノづくりはできない」
と教わりました。私は数字があまり得意ではなかったので、今後
ビジネスの世界でやっていく上で最初に克服しておかなければと、
就職活動を180度転換して、外資系の証券会社に入社しました。3
年勤めた後、フランスのビジネススクール「INSEAD(インシアード)」
に留学したのですが、その頃はまだ数字の勉強の延長線のような
感覚もあったので、自分が何をしたいか分からない時期でした。

前田 それでも非常に高いパフォーマンスを出していられる
のは素晴らしい。モノづくりが好きだからメーカーへ行こう、で
もその前にお金の流れを学ぶ必要があるから証券会社へ、さらに
学びを深めようとビジネススクールへと、その都度目標を定め、
モチベーションを上げていますね。

■対談



前田 裕——まえた ゆたか

■関西大学学長。1956年大阪府大阪市生まれ。1979年大阪府立大学工学部卒業。1981年大阪府立大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了。1979年大阪府立高等学校教諭。1988年関西大学に着任し、2002年工学部教授。2008年システム理工学部長、2009年大学院理工学研究科長を歴任し、2012年副学長。2020年10月より現職。一般社団法人日本私立大学連盟副会長。公益財団法人関西生産性本部理事。特定非営利活動法人大学コンソーシアム大阪副理事長。

相変わらず男女の枠の中で、
女性が厳しい環境に置かれている国や文化があるので、その環境から
まず解放しなければという思いもあります。

宮地 局面ごとに、俯瞰して物事を見ている部分があるのだと思います。証券会社で働くのは3年と自分で決めて、3年でどれだけできるかを考えたり、ビジネススクールも1年なので、ここまで頑張ろうと目標を立てたり。思えば学生時代のアルバイトも、家庭教師やバーテンダー、旅館の仲居さんなど、学生時代にしかできないことを選びました。常に今できるベストは何か、今しかできないことは何かを考えている気がします。

前田 MBAを取られてからはどうされたのですか。

宮地 INSEADで勉強している中で、ラグジュアリーブランドビジネスを知りました。モノに感性や世界観など、さらに付加価値を持たせるビジネスを面白いと思ったのが、この世界に入るきっかけです。ご縁があり、LVMHグループの「モエヘネシーディアジオ」の香港オフィスで新規事業開発などを担当しました。その後、日本支社でマーケティングを経験し、ラグジュアリーブランドの「ロエベ」でリテールの経験を積み、2017年にカルティエに入社しました。

◆核を守りながら 社会の変化に対応するブランディングを

前田 マーケティングというと、ブランディングを考えるというイメージですが、宮地さんの中ではモノづくりの延長線上という認識なのでしょうか。違いはありますか。

宮地 モノという核があって、その周りにどう空気感を作るかというのが、ブランドビジネスです。私たちが言えばカルティエの「トリニティ」リングというモノが核としてあり、素材が金属でというモノ自体の機能があります。そのモノを身に着けることによって想起させるイメージを作っていくことがブランディングの一部だと思っています。

前田 私たち大学も絶えずブランディングを気にしています。モノの場合は、まず機能性が高いか低いかという指標があり、その上でデザインを含め他が追随できないものがあれば、それはモノの良さというブランディングの核になり得るでしょう。大学の場合、その核の部分は何か。教育や研究、地域連携などがそれに当たります。しかし、それはどこの大学もやっていることで、正直、差別化するのは難しい部分もあります。

宮地 コアバリューはとても大事です。その上で私たちが意識しているのは、ストーリーテリングであり哲学です。どういう価値観、精神を持っているのか、そこから得られるものは何か。それを繰り返し語っていく。

前田 「トリニティ」コレクションは今年100周年だそうです。関西大学にも100年以上にわたり掲げている「学の実化」という理念があります。私はそれを「社会と大学の相互作用」と理解しているのですが、この核を大事に守っていくことも、ブランディングの一つなんですね。

宮地 おっしゃる通りですね。さらに社会やライフスタイルが変わっていく中で、状況に応じてストーリーをどう再解釈するかということも大事になってくると思います。

◆大阪・関西万博が 多様な視点、価値観に気が付く機会に

前田 カルティエは2025年の大阪・関西万博に、女性のエンパワメント（応援）などをテーマにした「ウーマンズパビリオン」を出展されます。スローガンの「ともに生き、ともに輝く未来へ」は、英語では「When women thrive, humanity thrives」となっています。

宮地 カルティエには既に女性の活躍を積極的に応援する文化がありますが、私たちが強調したいのは「ともに」です。女性、男性という二つの軸で語る時代ではありませんし、男女平等の社会というのは、どちらか一方の努力だけでは成り立たない。その思いを込めて、日本語では「ともに生き、ともに輝く未来へ」としています。

前田 大学でも人権の一部としてジェンダー問題に取り組んでいますが、その枠組はもはや男女ではなく、「LGBTQ+」の時代です。早くその認識が当たり前の社会になってほしいと思う一方、相変わらず男女の枠の中で、女性が厳しい環境に置かれている国や文化があるので、その環境からまず解放しなければという思いもあります。

宮地 私は幸いにも、自分が女性だということを意識せずにやってこられました。ジェンダー平等といっても何が問題なの？と思っている方も多いと思いますが、何が問題なのか知らないことが問題の一部であり、アンコンシャスバイアス（無意識の偏見）と言えるかもしれません。2023年に世界経済フォーラム（WEF）が発表した「ジェンダーギャップ指数」で、日本は146カ国中125位という結果でした。この事実を知って、やはり何かがおかしいのではないかなと思わなければいけない。違う国と比較して、違う視点を持つことで、なるほどと思うこともあると思います。そういう意味では、アカデミアの役割はとても大事です。アンコンシャスをコンシャスにする。カルティエの「ウーマンズパビリオン」もその一助になればと思っています。

前田 関西大学もぜひ一緒にできる企画を提案したいと思います。最後に大学に期待することを教えてください。

宮地 大学は社会に出る前に、いろいろな価値観を醸成する場所であると思います。日本は特に社会的規範意識が強く、もちろんそれに順応していかなければいけない部分もある。でも、どこかで離れていくプロセスもあっていいと思います。その源泉となる自信や独自の規範が必要です。学生が社会に飛び立つための翼を授けてあげてほしいですね。



▲大阪・関西万博「ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier」© Cartier

私たちが強調したいのは「ともに」です。
女性、男性という二つの軸で語る時代ではありませんし、
男女平等の社会というのは、どちらか一方の努力だけでは成り立たない。



宮地 純——みやち じゅん

■カルティエ ジャパン プレジデント&CEO。京都大学法学部卒業後、外資系証券会社に入社。INSEADにてMBAを取得後、ラグジュアリー業界でのキャリアをスタート。2017年リシュモン ジャパン株式会社に入社し、カルティエ ジャパンマーケティング&コミュニケーション本部長に就任。2020年8月より現職。



WHEN WOMEN THRIVE, HUMANITY THRIVES

■研究最前線

戦前から占領期までの法と法学の研究 • Research on the law and legal studies from before world war II to the period of occupation

戦時中や占領下、 法学者は何をしていたのか？

資料の発掘と丁寧な読み込みで、知られざる実相を浮き彫りに

What did legal scholars do during the war and under the occupation?

The unearthing of documents and careful reading have revealed a previously unknown state of affairs

●法学部 小石川 裕介 准教授

• Faculty of Law — Associate Professor *Yusuke Koishikawa*

1931年満州事変、1937年日中戦争勃発、1941年真珠湾攻撃を機に第二次世界大戦参戦、1945年終戦、1952年のサンフランシスコ平和条約まで続く占領期。この激動の20年間に於いては、法制度もともに機能していなかったのではないかというイメージを持つ人もいる。しかし、戦時中も裁判は行われていた。NHK連続テレビ小説「虎に翼」の舞台となり、注目されるこの時代の法曹界。どのような法制度があり、法学者は何をしていたのだろうか。法学部の小石川裕介准教授は先行研究の少ないこのテーマに光を当て、その実像を少しずつ鮮明にしている。

After the 1931 Manchurian incident, the 1937 outbreak of the Sino-Japanese War, and the 1941 attack on Pearl Harbor, Japan participated in the Second World War until the end of the war in 1945 and then was in a period of occupation until the San Francisco Peace Treaty was signed in 1952. Some people may have the impression that the legal system was not functioning normally during those two decades of turbulence. However, there were still trials being held during the war. The judicial world of this era has attracted attention after it became the setting for the morning serial drama “Tora ni Tsubasa” televised by NHK. What kind of legal system existed and what were the legal scholars of the time doing? Associate Professor Yusuke Koishikawa of the Faculty of Law has thrown light on this theme, regarding which there had been little previous research, and he has gradually clarified the real situation.



▲小石川准教授の共著書
Books co-authored by
Associate Professor Koishikawa



■戦時期であっても、日本の法は機能していた？

——ご専門の分野について教えてください。

日本法制史です。なかでも、1930～1950年ごろの戦前から戦後の占領期までを中心に研究しています。

——なぜその時代を選んだのですか。

あまり研究がされておらず、それほど明らかになっていない時代なので面白いなど。この時期は戦争で法や法学がうまく機能しなかった時代だと思われがちですが、実はそうでもありません。同時代のドイツは事実上ワイマール憲法を停止しましたが、日本は憲法を停止せず、法制度は一応機能して、戦後の日本国憲法にもつながっていきました。

——研究から明らかになったことはありますか。

法学者は戦争末期の時代でも、可能な限り法学をやろうとしていたということ。戦時中ですので、国家の顔色をうかがう人もいましたし、反対に半分ボイコットするような人たちもいました。けれども、少なくない数の法学者は目の前の法制度にしっかりと向き合い、自分の仕事を果たそうとしていたんです。

そして、戦後になって、戦時中に活躍した法学者の多くがそのまま活躍することになります。公職や教職を追放された人もいましたが、それほど多くはありませんでした。

例えば、戦後の行政法の大家、田中二郎は戦時中に自分の理論を組み立てています。戦時中は国家の存在が大きくなって、さまざまな分野に国家が出張ってきます。田中はそれに対応する法解釈を仕立て上げ、理論付けていきました。その法理論の多くが戦後、行政法の通説として扱われるようになります。戦時中の研究が戦後の基礎になったと考えることができます。

少なくとも人材の側面から見ると、戦前と戦後の間にはそこまで大きな断絶はなく、基本的には連続しています。日本国憲法の施行が戦前から戦後への変わり目だと思う方は多いですが、いくつかの法分野ではもう少し後ろにずれて起こりました。日本国憲法施行は1947年。この時点の法学者の多くは戦前に教育を受けて、戦前に論文を発表してきた人たちだからです。制度が新しくなれば、すべてがガラリと変わるというわけではなく、関わる人が対応できない、あるいは対応しようとしないうちは変わっていくことができないのです。

■ Did Japanese law continue to function during the war?

—— Please tell us about your specialist field.

My field is the history of the Japanese legal system. In particular, my research mainly focuses on the period from 1930 to around 1950, from before the Second World War to the period of occupation after the war.

—— Why did you choose that period?

I found it interesting because it was a period that had not been researched very much and it wasn't really clear what had happened. People tend to think of this period as an era when the law and legal studies were not really functioning properly due to the war, but actually that isn't true. During that same period in Germany, the enforcement of the Weimar Constitution effectively stopped. However, the constitution of Japan was not suspended and the legal system more or less continued to function, which connected to the Constitution of Japan that was established after the war.

—— What have you found from your research?

That even towards the end of the war, the legal scholars were still trying to conduct their legal studies as much as they could. As it was during a time of war, some of them were trying to please the state as they did so, while others were half boycotting it. Nevertheless, a not insignificant number of legal scholars continued to squarely take on the legal system in front of them and attempted to fulfill the roles of their jobs.

Then, when the war had ended, many of the legal scholars who had been active during the war continued their activities. There were some people who were purged from public office or the teaching profession, but it wasn't really a very large number of people.

For example, Jiro Tanaka, who was an authority on administrative law after the war, had spent time during the war assembling his own theories. The presence of the state increased during the war, and it encroached into various fields. Tanaka put together legal interpretations to deal with this, and developed the theories for them. After the war, a lot of those legal theories went on to be treated as the commonly accepted theories of administrative law. We can therefore view this as the research performed during the war becoming the foundations for what came after the war.

At the very least, from the aspect of the scholars involved, there was no major discontinuity between the scholars before the war and those after the war, with basically the same situation continuing. Many people see the enforcement of the Constitution of Japan as a turning point between the situation before the war and that after it, but in many legal fields, the change actually only occurred later on. The Constitution of Japan came into effect in 1947. However, many of the legal scholars at that time had been educated before the war and had presented their theses before the war. Just because a system is updated, it does not mean that everything changes all of a sudden. It is not possible for things to change while the people involved remain unable to deal with the change, or do not attempt to respond to the change.

■研究最前線



▲研究室でゼミ生の指導にあたる小石川准教授
Instructing students in his laboratory



▲資料として古本屋で購入した
戦前の法学生の授業ノート
Prewar law student notebooks
he bought at a used bookstore
for reference



◀戦前の司法試験雑誌のコピー
Stacks of prewar bar exam magazines

はただ解説をしていただけといった批判を受けましたが、戦時中においては重要な仕事の一つだったのだと思います。

——この時代についての研究は、具体的にどのように進めるのですか。

当時の研究者の論文や著作を丁寧に読み込むのはもちろん、当時の大学や各種組織に関する一次資料や二次資料を幅広く収集、整理して、どういう人がいつどのようなことを述べているのかをマッピングしていきます。

最近では法学者の個人の文書、ノートやメモなども公開されるようになってきて、次第に実態が分かるようになってきました。

当時の法学者の活動を調べると、非常に多くの仕事をこなしているんですよ。ちょっと僕にはできないなというぐらい。当時も今も生きているのは同じ人間ですので、共感を覚えるところもあります。戦時中だから今とは何もかも違うということではないと思います。

■公文書から個人のメモまで、当時の実像を探る

——研究上の難しさやご苦労されたことは何ですか。

戦時中のことを扱うので、やはり資料が焼失、散逸していることがあります。例えば1945年の東京大空襲で法制局が燃えてしまい、戦争末期の話が資料上はよく分からない。その分、ノートやメモをはじめ、個人のもとに残っている文書などをつなぎ合わせて推測していきます。戦前と戦後がどう変わったのか、もしくは変わらなかったのかを、今後も考察していきたいと思っています。

——そもそも法制史を研究しようと思ったのは、なぜですか？

民法とか刑法とか、実定法って難しいじゃないですか。もともと歴史が好きでしたので、法制史の講義を受けてみたら面白かった。それでゼミを選んで、大学院に進み、研究者になってしまったというわけです。でも、法制史をやっていく上では、実定法のことを分かっているなければできない。結局、後になって泣きながら勉強し直しました。

■From control to competition - the transition from prewar to postwar economic law

—— Have you paid particular attention to any other areas?

A new area of economic law was created under the wartime control. When we think of economic law today, it is basically something to prepare the systems for companies to compete with each other. However, the basis for the economic law during the war was the idea of having control by the state. In other words, despite it being the same economic law, it was almost completely the opposite legal field.

—— What specific control was there during the war?

One of the most widely known laws is the National Mobilization Act. This National Mobilization Act was a law that basically made it possible for the state to control the material resources and human resources.

As things such as Imperial ordinances and ministerial ordinances were established based on the National Mobilization Act, one of the jobs of the legal scholars of the time was to consider how the ordinances related to each other, and to the laws enacted previously, and to add an explanation to each ordinance as they organized them. When Japan moved into the postwar period, there was criticism that all the scholars had been doing was adding explanations. However, I believe that they had been performing one of the very important jobs during the period of the war.

—— How do you actually advance your research on this period?

Of course, I read the theses and writings of the researchers of the time very carefully and thoroughly, and I also collect and organize a wide range of primary sources and secondary sources related to the universities and the various organizations at that time. I then work through these to match up what kind of people were saying what kind of thing and when.

In recent years, we are starting to see the personal documents, notebooks and memos of the legal scholars and we are gradually finding out what the actual situation was like.

When we investigate the activities of the legal scholars of the time, they were performing a very large number of jobs. In fact, this was to the extent that I suspect I would not have been able to cope. The people living in those times and now are all the same human beings, so I feel sympathy for them. I don't think we can just think that everything was different to today because they were living during a war.

■Searching for a real image of that time in everything from public documents to personal memos

—— What has been difficult about the research and where have you struggled?

As can be expected, because I am handling things from the during the war, a lot of the materials were destroyed in fire or got scattered and lost. For example, the Legislation Bureau was destroyed in fire during the Tokyo air raids in 1945, so it is not possible to get a clear picture of the situation at the end of the war from the documents. To make up for that, I work to infer the situation by piecing together the documents that remained with individuals, such as notebooks and memos. I want to continue to consider how things changed between before the war and after it, or indeed, whether it actually did change at all.

—— What made you want to start researching legal history in the first place?

Well, you know, positive law such as civil law and criminal law is quite difficult. I always liked history, so I tried attending a lecture on legal history and I found it interesting. That made me choose a seminar on it, and I then proceeded to graduate school and ended up as a researcher. However, to pursue a study of legal history, it is necessary to understand positive law. In the end, I had to go back to it later and struggle to restudy it.

■統制から競争へ、戦前から戦後の経済法の転換

——他に注目したことはありますか。

戦時統制下で新たに経済法分野が生まれています。経済法といえば、現在は基本的には企業が競争するための制度を整えるものですが、戦時中の経済法では国家が統制するという考え方が根底にありました。つまり、同じ経済法といっても、ほとんど真逆の法学分野になっているということです。

——戦時中は具体的にどのような統制があったのでしょうか。

よく知られた法律ですと、国家総動員法があります。国家総動員法は物的資源、人的資源について、国家が基本的に統制することができるという法律です。

国家総動員法に基づいて勅令や省令などが制定されたので、それらがどのように相互に関係しているのか、今までの法律とどのように関係するのかを、一つずつ解説を付けながら整理するのが、当時の法学者の仕事になっていました。戦後になってから、それ

●足掛け4年。政府機関資料を後世に残す

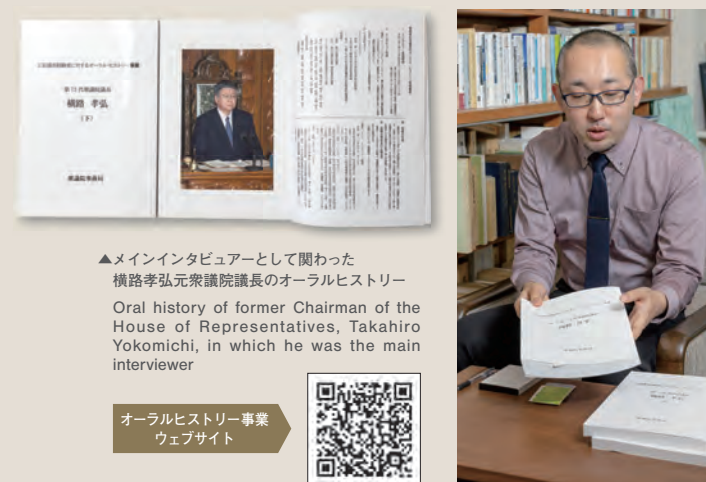
先ごろ公表された、横路孝弘元衆議院議長のオーラルヒストリーの作成に携わった小石川准教授。これは衆議院事務局の事業で、正副議長を務めた横路元議長に対して、出生からの生涯をインタビューし、その政治活動全般についての感想や思いを記録していくもの。活動の中核を担う研究者に声を掛けられ、メインインタビュアーの一人を務めた。

作成には4年もの期間を要した。後の世代が政治判断を行う際、また歴史的検証を行う際に参考となるよう、本文と詳細な注釈を含め、約100万字という膨大かつ精緻な記録になっている。90年代の資料など、今まで手に入らなかったような資料まで公開している。小石川准教授とこの事業への関わりは今後も続く予定で、次のインタビューも始まっている。

●Four years of work. Preserving government institution materials for future generations

Associate Professor Koishikawa was involved in the production of the recently published oral history of Takahiro Yokomichi, who was previously Speaker of the House of Representatives. This was a project of the Secretariat of the House of Representatives. Former Speaker Yokomichi served as both the Speaker and Vice Speaker. He was interviewed about his whole life from birth and a record was created of his impressions and thoughts on the political activities in general. Associate Professor Koishikawa was invited to participate by the researcher playing the central role in the activities and served as one of the main interviewers.

The creation of the oral history took four years. The aim was to create something to be a useful reference when future generations make political judgments or perform historical verification and it became a very large and detailed record with the main text and detailed explanatory notes totaling about a million characters. Materials that were previously impossible to obtain have also been disclosed, such as documents from the 1990s. It is planned that the involvement of Associate Professor Koishikawa in this project will continue from now on, and the next interviews have already begun.



▲メインインタビュアーとして関わった
横路孝弘元衆議院議長のオーラルヒストリー
Oral history of former Chairman of the
House of Representatives, Takahiro
Yokomichi, in which he was the main
interviewer

オーラルヒストリー事業
ウェブサイト



LEADERS NOW!

舞台に立つ“誇り”をつかむため、自分を磨き続ける 誰かの喜ぶ姿が踊り続ける原動力

●ダンサー・俳優
脇坂 美帆 さん — 社会学部 2010年卒業 —

舞台上で華やかに歌い踊る人たちの姿は、観客から眩しく輝いて見えるものだ。しかし、その陰では日々惜しめない努力を重ね、つらい思いや悩みに苦しむこともある。「悔しくて泣いたことはたくさんあります」——今はそんな苦労も笑顔で語る脇坂美帆さん。舞台人の彼女が歩んできた道のりとは……。

●幼少期から続けたバレエを武器に「劇団四季」へ



▲バレエを始めたころの脇坂さん(当時6歳)

「舞台に立つ時は命懸けです」。朗らかで明るい笑顔が魅力的な脇坂さんも、舞台の話となればその目の奥に力強い光を宿す。劇団四季の舞台をはじめ、数々のステージで華々しくスポットライトを浴びてきた生粋の舞台人だ。近所に住むお姉さんの発表会を見て「私もバレエを踊りたい!」と声を上げたのは6歳の時。家の近くにあるスタジオへ通い始めた。負けず嫌いの性格もあって、上手になりたいと夢中で踊り続ける日々。「あの子は練習しなくてもできることが私は練習してもできない、とスタジオのトイレで悔し泣きをしたこともあります」。しかし熱心に練習を重ねてめきめき上達。努力の甲斐あってスタジオでは特進クラスに所属していたが、才能ある仲間たちを見て、自分がバレリーナを職業にするのは無理だとも感じていたという。新たに目指したのはミュージカルの世界。「中学2年生の時に観た劇団四季の『キャッツ』が大好きで、私もあの猫になりたい!と想着いました」。パンフレットにあるキャストたちの経歴にバレ

エの文字があるのを見つけ、自分もこの世界につながっているかもしれないと心ときめかせた。その一方で、関大一高から関大へ進学。バレエと学生生活の二足のわらじ生活を送っていたが、同級生たちが就職の準備を始める頃に脇坂さんはニューヨークへ留学することを決意した。当時は日本でミュージカル俳優になるための情報が得にくく、まずは本場であるニューヨークに行こう!と思い立ったのだ。

エの文字があるのを見つけ、自分もこの世界につながっているかもしれないと心ときめかせた。

その一方で、関大一高から関大へ進学。バレエと学生生活の二足のわらじ生活を送っていたが、同級生たちが就職の準備を始める頃に脇坂さんはニューヨークへ留学することを決意した。当時は日本でミュージカル俳優になるための情報が得にくく、まずは本場であるニューヨークに行こう!と思い立ったのだ。

現地のダンススタジオで劇団四季出身者やオーディション合格者たちと知り合い、彼らとのレッスンの中で初めて自身に手応えを感じた。「私の夢は現実として考えていいんだ、ステージの上に立つ仕事したい!」とはっきり思いました。舞台人になろう、いや「なる」って決心したんです。

帰国後、劇団四季オーディションに初チャレンジで見事合格、ミュージカル俳優への道が目前に開かれた。そして初舞台はなんと4カ月後。『オペラ座の怪人』のバレリーナ役が与えられた。その後も、『夢から醒めた夢』、『コーラス・ライン』など数々の舞台に立ったが、プロの道は厳しいもので3年後には退団することになる。



舞台出演で入学式には出席できず、母・あけ美さんと千里山キャンパスで記念撮影のみ行った▶

◀大学の入学式当日に行われた、所属する地主兼エコー・ド・バレエ初主役の舞台



◀▲“自分を鼓舞してくれる場所” ニューヨークにて

●“ニューヨークの魔法”で苦渋の日々を脱し再び舞台に

「それでも舞台に立ち続けたかったので、退団後はフリーのミュージカル俳優として活動を始めました。最初はとにかくオーディションを受け続け、収入の有無にかかわらずたくさんの舞台に立ちましたね」。

バレエの公演、ダンスの公演、勉強のためと芝居だけの小劇場公演にも立ちながら、合間には歌やダンスのレッスン。そして生活のためにアルバイトもこなし無我夢中だった。そんながむしゃらな日々を続けて3年が経った頃には、心身共に疲れ果てボロボロな状態に。

このままではダメになる……限界を感じた脇坂さんは、“自分を鼓舞してくれる場所”へ。進むべき道を定めたニューヨークへもう一度旅立つことにした。「3カ月間、立ち上がれなくなるほどやみくもに踊り続ける毎日を過ごした中で、『私には可能性がある』『私なら出来る』と明確な自信が再び湧いてくるのを感じました。私はこれを“ニューヨークの魔法”と呼んでいます(笑)」。

帰国してすぐにミュージカルのオーディションに参加し、ニューヨークで充填したエネルギーと自信を力にして合格をつかんだ。これをきっかけに商業ミュージカルの舞台へ復帰し、以降、バレエやダンス公演のほか、人気アーティストのコンサートでもバックダンサーを務め、自主公演の企画やバレエ講師など活躍の場を広げている。

●努力を怠らず自分磨き、それが仕事への責任

仕事をする上で大切にしているのは“自分が選んだ事に責任を持つ”こと。「私の思う責任とは自分を磨き続けること。少しでも休みができればこのレッスンに参加しようかと考えます。人前でパフォーマンスする以上、それが真摯な姿勢だと思うから、日々の練習も妥協しません」。

自分が納得できるまで自身を高め続けてこそ、舞台にも胸を張って立つことができる。そして人に教える仕事もできるというのが脇坂さんの持論。「バレエ教室の生徒には発表会前に『誇りを持って』と必ず言うんです。舞台に立てる自分に誇りを持ってほしいと。積み重ねてきた努力全てが誇りになると思うので、その仕事に携われている自分にも同じ言葉を掛けています」。

そんな彼女も自分の仕事に対する悩みはあった。東日本大震災やコロナ禍……一時期はエンターテインメントの世界など不要だという声も。「医療や救援など今はもっと求められるものがある中で、劇場に集まっている場合じゃないのでは、と悩みました。けれど自分の踊りに喜びや癒しを見つけてくれる人が一人でもいるなら。そのために自分は自分にできることをしようと思いました」。

コロナ禍で出演舞台が公演中止になった時には、何か届けなけ

自分で決めた道を納得いくまで極めたい、その気持ちで挑み続けられ、新しい景色が見える場所に必ずたどり着くことができます。



脇坂 美帆——わきさか みほ

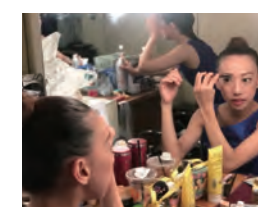
■1987年大阪府吹田市生まれ。関西大学第一高等学校卒業後に関西大学社会学部へ進学し、2010年に卒業。6歳からバレエを始め、ミュージカル俳優の道を目指し21歳で劇団四季オーディションに研究生として合格。『オペラ座の怪人』など数々の舞台を踏んだ後、退団。現在はバレエやミュージカルの舞台に立つほか、人気アーティストのコンサートでバックダンサーも務める。一方で、バレエ講師やアルゼンチンタンゴの自主公演を企画するなど精力的な活動を続けている。



▲初のアルゼンチンタンゴ自主公演「Todo o Nada」より

れば!とスタジオで踊った作品をYouTubeに公開。「画面の向こうで誰かが私の踊りを見て、元気になった、癒された、とわざわざでも思ってくれたらうれしい。今でもそういった声が私の踊り続ける原動力なんです」。

●好きだと思えた事は絶対に手放さない!



▲舞台メイクを施す脇坂さん

大学案内にあった「多様な視点でものごとを見る」というコピーに惹かれて関大では社会学部を選んだ。社会学部の女子学生という意味で名付けられた「社ガール」仲間と共に、バレエやミュージカルのことは一旦忘れて、リラックスできる学生生活を楽しめたという大学時代。「自分の仕事にはさまざまなものの見方が必要で、コミュニケーションスキルも大切です。それが自然とできているのは社会学部での学びや仲間との時間で得た経験値のおかげですね」。今、その学生時代を送る後輩たちには「好きだと思えたことは、絶対に手放さないで」とメッセージを送る。「私自身、オーディションに落ちたり仕事がなかったり……つらくて泣いたこともたくさんあります。それでも踊ることが好きでやめることはできなかった。自分で決めた道を納得いくまで極めたい、その気持ちで挑み続けられ、新しい景色が見える場所に必ずたどり着くことができます。私もバレエやダンスが自分の新しい世界を次々に広げてくれた。ただ真っ直ぐに努力を続けてきたからこそ、開けた道だと思っています」。

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]

応援する楽しさ、 応援される喜び！

充実した大学生活の秘訣は応援団にあり

●第102代関西大学応援団

社会学部4年次生 団長（吹奏楽部）

森口 友翔 さん（兵庫県立伊丹北高等学校）

文学部4年次生 副団長（バトン・チアリーダー部）

岸田 愛菜 さん（関西大学第一高等学校）

化学生命工学部2年次生 部長（リーダー部）

桜田 凌成 さん（兵庫県立長田高等学校）



▲千成瓢箪

100年以上の歴史を誇る関西大学応援団。応援団としての魂が込められ、代々引き継がれる紫紺の団旗、団太鼓、千成瓢箪などといった団道具を用いて、演舞演奏と声で関西大学の全学友を鼓舞する。現在はリーダー部、吹奏楽部、バトン・チアリーダー部の3部から成る総勢147人の団体だ。活動の醍醐味や目標について、団長、副団長、リーダー部長へインタビュー。長き伝統を継承する団員たちは、関西大学への愛と、葛藤や議論を重ねながら向上していく「団」の矜持にあふれていた。

●応援団を目指し関西大学へ

「中学生の頃から関西大学応援団に憧れていました」。そう語るのは、関西大学応援団第102代団長の森口さん。森口さんは吹奏楽部で打楽器を担当する傍ら、2023年12月に団長に就任した。「父が元副団長という縁で、昔から関大野球部の試合をよく見に行っていました。私も野球をやっていたのですが、試合よりも応援団ばかり見っていました(笑)」。学ランや羽織袴姿で勇壮に舞い、あらん限りの声で応援をする団員たちに心惹かれた。「吹奏楽部に入ったのも、団の一員になるためです」。一貫した思いが実を結んでいる。



●団長 森口友翔さん

▼リーダー部、吹奏楽部、バトン・チアリーダー部の3部が所属する関西大学応援団



●日々、自分の成長を実感

副団長の岸田さんは、バトン・チアリーダー部所属。応援団として活動する際には、バトン・チアリーダー部の衣装ではなく羽織袴姿になり、壮健な演舞で魅了する。「応援団員としての活動なので、チアのユニフォームで応援できないことに抵抗はありません。むしろ副団長になったからには団を引っ張りたいという気持ちが強いんです」。もちろん、森口さんも応援団長として応援する時は打楽器を置き、羽織袴を着て団の先頭に立つ。



●副団長 岸田愛菜さん

そして、歴史的に関西大学応援団の中核を成すのは、桜田さんが部長を務めるリーダー部だ。応援の中心に立ち、活動を主導し、イベントを運営するという文字通り団をけん引する部だ。「新入生歓迎オリエンテーションで当時のリーダー部長に声を掛けられ、人柄に惹かれて入部を決意しました。リーダー部なら自分が成長できるような予感がしました」。何事にも積極的に動けるようになり、2年次生にして成長を実感している。

●応援される側にもなれる喜び

応援団の活動は大きく二つ。一つは、体育会をはじめとするクラブの応援だ。「特に野球部の試合には熱が入ります。明治神宮野球場で応援するのが夢なんです」と森口団長。もう一つの活動は、学内外で行う演舞演奏。卒業式・入学式といった大学のイベントや式典に招待されるなどして、演舞演奏を披露している。岸田さんが「応援団で企画する団祭が好きです。見た人に元気を与えること、応援団を応援してくださる方々への感謝を伝えることが目的ですが、いつも応援する側の私たちが、たくさんの方から応援していただけるステージなんです」と語れば、桜田さんは「私は連盟祭です。普段はライバル同士の関関同立の応援団が、京都駅のステージで一堂に会して演舞演奏をするんです。同じよう

な活動に取り組む他大学の仲間たちから刺激を受け、自身の活動に還元することが楽しいですよ」と話す。

●団の一員という自覚の芽生え

しかし、団の運営には課題も少なくないという。例えば岸田さんは、後輩のモチベーションアップに心を砕く。「応援団としての活動とバトン・チアリーダー部独自の活動との両立が難しいです。例えば、チアリーディング大会においては、普段の応援活動と違ったスキルが求められるため、両立に悩みを抱える部員もいます」。忙しい中で団としての活動も楽しんでもらうために、岸田さんが導き出した策は「まず自分が楽しむこと」だ。「誰かのために懸命に活動した後の達成感で、笑顔になっている姿を見てもらうようにしています。結果、『応援に行くのが楽しみ!』『またイベントに出たい!』といった声の後輩から上がるようになり、応援団の一員という自覚が芽生えてきました」と岸田さんは顔をほころばせる。

一方、リーダー部の悩みは部員確保だ。現在は桜田部長を含む2年次生が3人、1年次生が1人という構成で、吹奏楽部96人、バトン・チアリーダー部47人と比較すると、寂しさを禁じ得ない。「昔ながらの堅い印象があるのかもしれませんが、継承すべき部分を見極めながら、時代の変化に合わせて活動内容もアップデートされています。トレンドの曲に合わせたオリジナルの演舞もあり、苦しいこともあります楽しい部です。礼儀礼節をはじめ、社会性が身に付き、心身の成長につながる部活動なんて、そうはないと思っています」。たぎる思い、あふれる魅力を後進に伝えるのが使命だ。



●リーダー部長 桜田凌成さん

●皆が納得するまで話し合う

団長の森口さんに、組織運営上の悩みはないのだろうか。「三



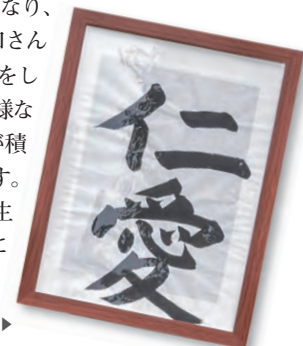
代々引き継がれる紫紺の団旗と太鼓



つの部が一つの応援団として活動しているので、意見の取りまとめには難しさもあります」。総勢147人の大所帯。しかも、各部が全く次元の異なる魅力を有している組織では、日々の活動やパフォーマンス内容などで意見のぶつかりが少なくないという。「でも私はポジティブにとらえています」。意見の対立は、団を盛り立てよう、良いパフォーマンスを披露しようと思えばこそ。最近では応援団について学ぶ研修会の実施にあたって、3人はじめ幹部の間で激論が交わされたと振り返る。「一方は『レクリエーションを中心にお互いを知る機会にすべき』、一方は『研修である以上、座学などを取り入れるべき』と、意見が割れました」。最終的な団の結論は「両方全力でやる!です。時間は限られていましたが、やり繰りをして実現。トップダウンではなく、皆が納得できるまで話し合って決めるのが、関大応援団です」。

●稀有な経験を得られる活動

最後にそれぞれの目標や応援団の魅力を改めて聞いた。団のスローガンについて語ったのは岸田さん。「互いを思いやるという気持ちを込めて、私たちは『仁愛』を掲げています。この言葉を体現する応援団を目指したい。そのために私が率先して周囲に気を配り、思いやりのある行動を心掛けています。そして、応援団での活動が人生で一番充実したと思えるようにしたいです」。桜田さんはリーダー部の誇りをのぞかせる。「今は先輩方に引っ張ってもらっていますが、本来応援団はリーダー部が中心にならなくては。自分が4年次生になったら団長になり、先頭に立つ覚悟でいます」。そして、森口さんは、「応援をして感謝される喜び、議論をして何かを作り上げる達成感、学内外の多様な人となつがれる価値。これほどの経験が積めるのは、応援団ならではの醍醐味です。将来社会に出たときの予習もでき、大学生活も充実させられる。応援団って本当に素晴らしいと思います」。



第102代関西大学応援団のスローガン▶

◎ 文学部創設100周年を迎え、記念シンポジウムを実施

歴史を礎に、次の100年に向け、さらなる進化を



▲「100周年記念シンポジウム」会場の様子

関西大学文学部は2024年、創設100周年を迎えた。文学部は駐日フランス大使で詩人・劇作家として知られるポール・クロデル氏の勧めを受け、1924年に専門部へ文学部が設置されて以来、複数学科を擁する時代を経て、2004年に1学科多専修となった。これまでに送り出した卒業生は約5万4,000人。現在は毎年約800人の新入生を迎えている。

創設100周年を迎えるにあたり、5月25日、千里山キャンパスにて「100周年記念シンポジウム」が開催された。当日は、関西



竹内洋名誉教授による基調講演



▲関西大学名誉教授によるパネルディスカッション

大学名誉教授の竹内洋氏による基調講演「葦の髄からの『文学部』論」をはじめ、名誉教授4人による話題提供やパネルディスカッションも行われ、主にこの30年を振り返りながら、未来への展望を描く機会となった。

また、4月7日～5月31日まで、関西大学博物館にて、文学部創設100周年と博物館開設30周年を記念する連携企画展「花開く



大阪の文化」も開催。大阪にかかわる作品・資料を中心とする4テーマから、文学部100年の歩み、博物館30年の探究の成果を展示した。

◎ 2024年度入学式を挙行。新入生歓迎行事・歓迎の集いも開催

桜が咲き始めたキャンパスに、新入生の笑顔あふれる

2024年度関西大学入学式が4月1日、大学院入学式が2日、千里山キャンパスにおいて挙行され、6,832人の学部生と845人の大学院生が新たな門出を迎えた。

また、3月31日には、今春から一人暮らしを始める新入生を対象に、学生同士の交流を促す「新入生歓迎の集い2024」も開催された。本イベントは、初めて一人暮らしをする在学生の父母から不安の声が寄せられたことを受け、大学と教育後援会・校友会・関大生協などが協力し、2018年度より行っている。当日は、ファシリテーターとして上級生や職員も参加し、約800人の新入生同士のスムーズな交流をサポート。応援団の演奏演奏をはじめ、本学校友でFM802DJの樋口大喜さん、大阪・関西万博公式キャラクターのミャクミャクと関大万博部による新入生歓迎セッションなども行われ、盛会のうちに終わった。

さらに、2日～4日には、オリエンテーション実行委員会運営のもと、各クラブ・サークルがブースを出展し、熱心に新入生を勧誘。各クラブのパフォーマンスも行われ、キャンパスはいつも以上に活気で満ちあふれた。



◎ 2025大阪・関西万博に向け、多様な活動が活発化

関西大学リボーンチャレンジ選定企業9社の大阪ヘルスケアパビリオン出展が決定 開幕まで1年を切り学生たちの機運も高まる



本学リボーンチャレンジの展示イメージ

関西大学リボーンチャレンジ
出展企業一覧



本学リボーンチャレンジから出展する大阪冶金興業株式会社の寺内代表取締役が、吉村知事より出展証を受領。(左から)立野中小・SU出展企画推進委員長、寺内氏、吉村大阪府知事、横山大阪市長▶



3月25日、日本国際博覧会大阪・パビリオン推進委員会より大阪ヘルスケアパビリオン「展示・出展ゾーン」への出展企業377社が公表され、関西大学リボーンチャレンジを通じて選定した企業9社の出展が決定した。

リボーンチャレンジとは、中小・スタートアップ出展企画推進委員会が主導する、大阪の中小企業・スタートアップの支援事業企画のこと。大阪ヘルスケアパビリオン内に設けられる展示・出展ゾーンにおいて、中小企業・スタートアップの優れた技術や魅力、成果を発信する。認定件数は全26件で、本学は教育機関として唯一選定されている。

また、4月20日に梅田キャンパスで行われた、大阪・関西万博公式ボランティアの学内説明会では、併設高校の生徒らを含む総勢600人超が参加。翌日の関大万博部新入生歓迎イベントでは、現役部員たちが万博部発足の経緯や活動内容、そして万博への熱い想いを丁寧に語り、ゲームも織り交ぜながら楽しく交流した。

5月19日には関大万博部の入部説明会が開催され、正式に150人が新メンバーとして加わった。関大万博部誕生からちょうど1年が経過し、未来社会クリエーターたちの士気は大きな高まりをみせている。



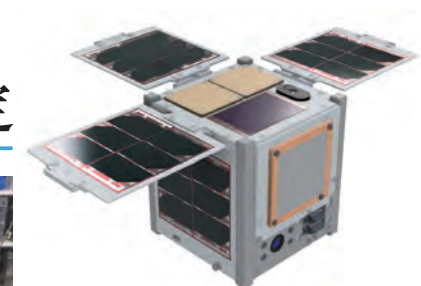
(写真・上) ボランティア説明会にて
(写真・下) 関大万博部新入生歓迎イベントで新入生と交流

◎ 関西大学初の人工衛星を開発、JAXAに引き渡し完了

今秋、国際宇宙ステーションから 超小型衛星「DENDEN-01」を放出予定

関西大学化学生命工学部の山縣雅紀准教授が代表(プロジェクトマネージャー)を務め、福井大学、名城大学、株式会社アークエッジ・スペースと共同開発した関西大学初の超小型人工衛星キューブサット「DENDEN-01」が完成し、6月4日、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)筑波宇宙センターへの引き渡しを完了した。

「DENDEN-01」は、JAXAおよびNPO法人宇宙工学コンソーシアム(UNISEC)により公募された「学術利用及び人材育成を目的とした『きぼう』からの超小型衛星放出機会の提供プログラム(J-CUBE)」に選ばれた衛星であり、さまざまな革新的エネルギー技術を実証する。特に温度変化の激しい宇宙空間でも電源の温度を保つ、固-固相転移型潜熱蓄熱材(SSPCM)を活用した電源温度安定化デバイスを搭載しているのが特徴。新型宇宙用太陽電池や高精度電力状態推定プログラムの実証も行い、高品質で安定した電力供給技術を実現し、さらに、高速通信や撮影画像データの人工衛星上での解析などの高負荷ミッションにも挑戦する。

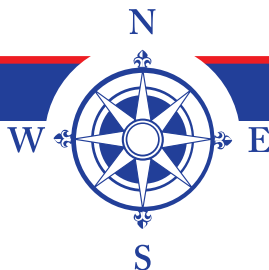


▲「DENDEN-01」外観図
(太陽電池パドル展開時)

▲山縣雅紀准教授と「DENDEN-01」

今後、JAXAにて輸送準備を整え、今秋には国際宇宙ステーション(ISS)に向けて打ち上げられた後に、高度380～420km程度の地球周回軌道に投入される予定だ。

本衛星プロジェクトで得られる成果は、今後の宇宙産業を担う高機能な超小型衛星の開発を加速させ、日本の宇宙産業のさらなる発展に役立つことが期待される。



セーリング競技の西田カピーリア桜良さんがパリ五輪日本代表選手に内定

4月20日～27日、フランス・イエール沖でセーリングのパリ五輪出場枠を懸けたラストチャンスレガッタが開催され、国別4位までが出場枠獲得の混合ナクラ17級において、西田カピーリア桜良さん(総合情報学部4年次生)・飯東潮吹さんペアが総合5位・国別4位となり、初の代表切符を手にした。5月25日には、千里山キャンパスで前田学長、芝井理事長らに代表内定を報告。「入賞を目標に頑張ります」と述べ、激励を受けていた。



(左から)前田学長、西田カピーリア桜良さん、芝井理事長



五輪に内定した西田カピーリア桜良さん・飯東潮吹さんペア▶

- 第21回U20アジア陸上競技選手権大会
男子棒高跳で吉田陸哉さんが銀メダル
- 第32回金栗記念選抜陸上中長距離大会
男子800mで高梨有仁さんが初優勝



吉田陸哉さん
(本人提供)

4月24日～27日、UAE・ドバイにて第21回U20アジア陸上競技選手権大会が開催され、男子棒高跳で陸上競技部の吉田陸哉さん(文学部2年次生)が自己ベストを5cm更新する5m25を叩き出し、銀メダルを獲得した。

また、4月13日、熊本県・えがお健康スタジアムにて日本グランプリシリーズ第32回金栗記念選抜陸上中長距離大会が行われ、同じく陸上競技部の高梨有仁さん(経済学部4年次生)が男子800mで1分48秒96をマーク。見事優勝に輝いた。



▲高梨有仁さん

サッカー部の吉村瑠晟さんがジュビロ磐田に入団内定



写真提供:
関大スポーツ編集局

2026年シーズンより、サッカー部の吉村瑠晟さん(経済学部3年次生)がJリーグ・ジュビロ磐田に選手として加入することが決定した。吉村さんのポジションはDF。左サイドバックとして、守備では強靱なフィジカルと高さのあるヘディング能力、球際の強さで相手を抑え、攻撃ではスピードを生かした駆け上がりで得点のチャンスを作り、攻守にわたってチームに貢献してきた。

第50回関西大学飛鳥史学文学講座を開講



4月14日から2025年3月2日にかけて、明日香村中央公民館にて「2024年度 飛鳥史学文学講座—やまと・あすか・まほろば塾—」(全14回)を開講している。

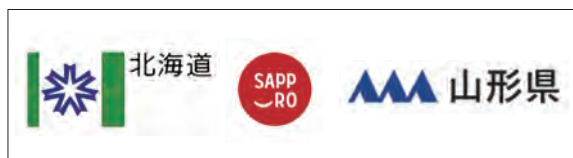
今年で50年目となった本講座は、極彩色壁画で有名な高松塚古墳の発見をきっかけに1975年に開講。これまでに延べ約11万人が受講し、根強い人気が続いている。

4月14日の開講式では、開講50周年を記念する短編映画「飛鳥とともに～BEYOND 50YEARS」を上映。本学飛鳥文化研究所・植田記念館名誉館長で本学名誉教授の米田文孝氏が講演し、約200人の参加者が熱心に耳を傾けた。



短編映画「飛鳥とともに～BEYOND 50YEARS」上映▶

北海道および札幌市、山形県と就職支援協定を締結



関西大学は4月22日、北海道ならびに札幌市の三者間で、道内および札幌圏域の次世代を担う人材の育成において、相互に連携・協力することを目的とした協定を締結。続く5月22日、山形県と東北地方の創生を意識した連携の更なる充実を図り、同地域からの受験生を拡大するとともに、地元のリーダーとなる人材育成を目的とした協定を締結した。



▲山形県庁で協定書を交わした前田裕学長(左)と吉村美栄子山形県知事

これにより、本学と自治体との就職支援協定は23件に。今後も地方自治体と密な連携を取りながら、学生の就職活動支援を通じて、連携地域への就職促進を図る。

